

「すだいだい」と若者が結ぶ島と都市

(山口県周南市大津島)

拓殖大学関ゼミナール四年

柏野太志・土屋友陽

《団体名》 拓殖大学関ゼミナール

《事業名》 すだいだい(代々)プロジェクト

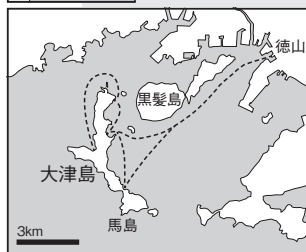
十年余になる

大津島と拓殖大学との交流

大津島は、徳山港の沖合一〇キロに位置し、人口は二二〇人弱、そのうち約八割が六五歳以上と著しく高齢化が進んでいます。私たちが所属する拓殖大学(東京都文京区)の関良基^{よき}ゼミナール(環境政策研究)では、学生が定期的に大津島を訪れ、島内で採れる柑橘「すだいだい(酢橙)」の生産・加工・商品開発、そして販売までを、島の方々

と協力しながら行なうことを柱に活動しています。

この活動のきっかけは、ゼミ一期生OBの太友翔太さんが、二〇一〇年に地域おこし協力隊として大津島に移住したことにさかのぼります。太友さんは協力隊の任期終了後も島に残って活動を続け、一四年からはアイランダー(毎年十一月に東京・池袋で開催される全国の島々が一堂に会する交流イベント。二〇年はオンライン開催)にも島の住民の皆さんと一緒に参加されていました。一七



おわつしま
大津島：徳山の南西約10km 沖合にある細長い丘陵状の島。面積約4.77km²、周囲約20.9km、人口217人(令和3年1月末日現在)。かつては2つの島だったが、400年ほど前に砂洲でつながった。太平洋戦争末期の特攻兵器・人間魚雷「回天」の訓練基地跡と記念館がある。

年からは、拓殖大の私たちの先輩にあたる学生たちが、同イベントのブースの手伝いスタッフとして参加してきています。関ゼミでは、この手伝いに先駆けて、一七年九月に研修合宿を大津島で開催、地域の方々には島の歴史や文化、産業に関する聞き取り調査を実施し、住民の皆さんとも交流しました。当初は、短期の島訪問、東京でのPRのサポートという位置づけに過ぎませんでしたが、一九年度に「離島人材育成基金(活動助成型)」に採択していた

だき、大津島をフィールドに、ゼミ活動として「すだいだいプロジェクト」を進めていくことになりました。

すだいだいプロジェクトの概要

プロジェクトでまず始めに取り掛かったのは、島の耕作放棄地の開墾と、すだいだいの苗六〇本の仮植えでした。



拓殖大学生と島の皆さんの集合写真。



商品開発研究で、「すだいだい」の代用品としてカボスを用いたカステラづくり。

八月には、すだいだい畑の整備とともに、高齢化のため普段はなかなか行なうことができない側溝や海岸の清掃活動にも取り組みました。私たちは若者ではありませんが、農作業や肉体労働には不慣れで、とても苦労しました。また、大津島は戦時中、人間魚雷「回天」の発射訓練基地が置かれていたことで知られていますが、私たちは、そのイメージとは異なるこの島の隠れた魅力を見つけアピールしていきたいと、地元の方々を招いてワークショップを行いました。結果、すだいだいを活用

した商品の提案やSNSによるPRなど、多くのアイデアを得ることができました。

九月には、ワークショップの成果

を活かし、冬に実をつけるすだいだいの代わりに、島産のカボスを用いた商品を試作しました。カステラやドレッシング、餡などの食べ物に限らず、芳香剤、入浴剤といった日用品づくりにも挑戦しました。このとき、カボスの果汁を混ぜた醤油で刺身を漬けたところ、とても美味しくなったため、翌月の大学の学園祭にて、カボスしょうゆを使った、タコの唐揚げを販売し、好評を博しました。

一月のアイランダー2019では、クラフトビール「すだいだいビール」を約一〇〇本販売。私たちが島の魅力を伝え、都会の方々に大津島を知っていただけるように努めました。翌二月には、島で自生していたすだいだい約一四〇〇個の収穫と、洗浄・皮むき・果汁絞りなどに取り組みました。これも、非常に苦勞が多い作業で、途中で実を落としてしまったり、採った果実を腐らせてしまったりなど、島の方々の指導と協力を得ながらなんとか進めることができました。

二〇年二月は、一年前に仮植えした苗木を、畑に植え替えました。また、六次産業化に取り組んでいる周防大島の瀬戸内ジャムズガーデンを訪れ、代表の松嶋匡史^{ただし}さんから、成功の要因や軌道に乗るまでの苦労などの貴重なお話をうかがいました。

本プロジェクトでは、延べ七十七人の学生が津島を訪れました。島の方々も定期的に行ってくる都会の学生たちとの交流を楽しみにしてくださっていました。

一方、島と関わる人数が増えていった結果、活動に対するモチベーションに温度差が生じるなどの課題も出てきました。プロジェクトに対する理解や事前学習が不十分のため、積極的に取り組めない学生がいたり、人口二〇〇人あまりの島に一度に多くの学生が訪れることで、効率的な活動ができなかったこともありました。

さらに新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年三月以降は、現地で事業活動が叶わなくなりました。しかし、

そこであきらめるのではなく、現在までオンライン会議などを定期的に開催し、島の方を交えて、プロジェクトのメンバーで打ち合わせを行なっています。一月にオンライン開催されたアイランダー2020へも参加しました。コロナについては、二〇二一年

もしばらくは状況が好転しそうにありませんが、離れていても島のためにできることを考え、都内の青空市などでの果実販売、喫茶店との商品コラボなどゼミ生が主体となって行動しています。

代々受け継ぎたい学生と島のつながり

今回の私たちの活動の中心は、大津島の活性化の第一歩として、耕作放棄



収穫した「すだいだい」。運ぶのも一苦労。



2021年2月に東京で開催された「すみだ青空市 ヤッチャバ」にて、「すだいだい」などを販売する柏野（左）と土屋。

地を開墾してすだいだい畑を拡充し、収穫した果実を高付加価値化することでした。しかし、島の方々から直接話を聞いてみると、もともと困っていたのは、海岸や側溝の清掃など、普段やりたくてもマンパワー不足でなかなか手を付けられないことでした。当然、若い私たちに期待が寄せられ、実際に手伝わせていただきましたが、漂流漂着ゴミによる海洋汚染や、深刻なインシシによる被害など、普段の学生生活では経験できない多くの課題に触れる機会となりました。これら地域課題の

離島人材育成基金助成事業事務局より

持続可能な島づくりを行なうにあたっては、地域住民の団結と行動が必要不可欠ですが、それだけでは壁に突き当たってしまうことも少なくありません。そんな時こそ、島外の学生をはじめとする〈外からの視点〉が活きるのではないかと考えています。

大学生と地元の住民が協力して地域課題解決に努める「域学連携」が推奨されており、その後押しをするのが離島人材育成基金助成事業の「活動助成型」です。同助成事業の中心は島で暮らす皆さんが主体となる活動に対する支援ですが、活動助成型は「島のために行動を起こしたい」という学生組織への助成となっています。

「すだいだい（代々）プロジェクト」では、実践的なゼミ活動の一環として大津島をフィールドに、島内の清掃作業、農作業、特産品であるすだいだいを使った商品開発など多岐に渡る取り組みを、地域の方々の協力のもと行なっています。島の生活を改善するための努力はもちろん、ゼミ生OBの大津島移住から始まった島とのつながりを、次の世代へと引き継いでいこうと摸索している点も、同様の活動を検討されているグループにはぜひ参考にしていただきたい視点です。活動助成型の助成事業を活用して、離島地域の活性化に対する理解と行動力を持った学生が代々輩出されることを期待しています。

（奥村）

解消をお手伝いすることが、私たち学生と島の方々との信頼関係の構築につながったと考えています。

私たちにとって、六次産業化を身を持って体験できたことは大きな学びです。地域の皆さんと一緒に農作業に汗を流し、生産者の苦勞の一片を感じた

ことも貴重な経験だと思えます。従来のゼミは、座学で環境政策を学ぶものでしたが、このプロジェクトで現場を知り、地域活性化に興味を持った学生が増えました。活動に参加したばかりの学生のなかには、プロジェクトの趣旨の理解が不十分な者もいましたが、

繰り返し島を訪れることで徐々に主体性を持って取り組むようになりました。今では、島おこし・地域活性化を仕事にしたい、大学を卒業しても大津島と関わり続け、いつか島に移住したいという学生も出てきているほどです。

また、島の特産品を学園祭で販売したことで、学内で関ゼミの活動が評判となり、ゼミ加入希望者も増えました。今回このプロジェクトに関わった私たちと、大津島の皆さんとのつながりは、先輩の代から受け継がれてきたものです。後輩たちは、実際に島へ行くことができないなど、厳しい状況に置かれています。ITの活用など都市にいなながらも可能な交流を続け、事業を代々受け継いでいってほしいです。この事業は始まったばかり。真の島の活性化には時間がかかります。私たち自身も、このつながりを途絶えさせることなく、今後も地域の方々とともに島おこしに取り組んでいければと思います。

■